平成14年　第95回～第99回

▶第95回「祝2002年ニューイヤーコンサート」もう9年もこのコンサートでニューイヤーを迎えられている名解説者，高和元彦さん，9年前の初出演の時とちっとも変わりません。

◀第96年「懐かしの映画，スクリーンミュージック特集」いまをときめく売れっ子のパーソナリティ襟川クロさんのはぎれのよい，わかりやすい解説に全員が拍手。

▼第97回「馬をテーマとしたラテン名曲集」20年以上続いているＮＨＫ・ＦＭの人気番組にご出演中の竹村淳さんによるすばらしいラテンコンサートにお客様もうっとり。

▼第98回「クラシックギター演奏会」生ギターのソロ演奏や、フルートとギターのデュオ演奏など熱演の田中桂子さん（左）上谷直子さん（右）

第99回　なんと，沖縄からこの催しのためにわざわざ上京して下さったゲストの与世山澄子さん。小三治師匠が，いま最も尊敬するジャズボーカリストだ。

▲第99回　「小三治のジャズオーディオ人生」5年ぶりに登場した小三治師匠の滋味あふれたオーディオ談議に時を忘れる。手にされているのは珍らしい落語のダイレクトカット盤。

東京新聞のホームページ
http://www.tokyo-np.co.jp/

浩俳賢吉のでじたる日記

アナログの素晴らしさ実感

五月に名古屋、七月に博多とミュージカル「マイフェアレディ」に出演する。その中でヒギンズ教授が花売り娘イライザに、音声学を教える場面があり、当時最新鋭だったエジソン発明の録音機が使われる。音が記録されるのは、蠟（ろう）でできた円筒と呼ばれる丸い筒である。

それが進歩してレコード盤になったのだが、78回転のSP盤から33回転のLP盤まで、我が家にもかなり残っている。しかしCDやMD（ミニディスク）の透明な音に慣れると、レコードのシャーシャーという雑音にもさして郷愁を感じることはないし、聞くためのプレーヤーもなくなったので、愛着は残るが、いつか捨てなくてはならないと思っていた。

それがある日、音俳優を志していた先輩にお会いしたら、現在オルトフォンというレコード針会社の社長をしておられ、チャリティーのレコードコンサートへお誘いを受けた。しかし正直言ってこのデジタルの時代に、レコードを聴きにわざわざ人が集まること自体、単なるノスタルジーとしか思えなかったし、もちろん期待もしなかった。

ところが聞こえてきた音は余りに素晴らしく、レコードで、アナログで、どうしてこんな音が出るのかとびっくりしてしまった。楽器やヒトの声が本来持っている倍音までもがはっきり分離され、しかも奥深い響きで聞こえるのだ。

実はレコードの溝には、そういったすべての音が刻まれているそうだ。それを精確に拾い上げる針がやっと開発され、この十年でアナログは長足の進歩を遂げたという。

私も後日、持参のレコードでコンサートを聞かせて頂き、「こんなにいい音がしたのか！　懐かしいレコードを捨てなくて良かった！」と、つくづく思った。いつかデジタルがその音を超えるかもしれないが、とりあえずアナログ健在にホッとしてしまったのだ。

それは多分、私が俳優という、様々な人生の深い心の襞（ひだ）から、その機微を拾い上げて表現する、いわばアナログそのものの仕事をしているせいかもしれない。

（はまはた・けんきち＝俳優　明子も）

▲東京新聞　2002.5.2.　夕刊より